

第62回日本生物工学会大会

10月27～29日に宮崎市で開催

第62回日本生物工学会大会（宮崎大会）が10月27～29日の3日間、宮崎市のワールド・コンベンションセンター・サミットで開かれる。

663題の一般講演（ポスター形式）と16のシンポジウムが行われ、民間企業のアピールの場として12のランチョンセミナーも設けた。シンポジウムの内容は次の通り（カッコ内はオーガナイザーの所属機関）。

【本部企画シンポジウム】

▷「酒類の香気成分研究の新展開—お酒の香りの基礎から最

新研究まで—」（酒総研、月桂冠、サントリー）▷「学発技術シーズ発表会—物質生産、装置、分析・周辺機器に関するシーズ提案」（アステラス製薬、味の素、鳥居薬品）▷「醗酵工業とものづくりの最前線」（丸菱バイオエッジ、タイテック、名古屋大）

【一般公募シンポジウム】

▷「生理活性ペプチド研究最前線」（宮崎大）▷「食の機能・安全を科学する—おいしさから生理活性、安全性の評価まで—」（大阪大、宮崎大）▷「ア



昨年、名古屋大学で開かれた第61回大会

カデミズム研究と産業の間—気安く実用化と言わないで—」（宮崎大、つくば環境微研）▷「物質生産ツールとしての微細藻—電子志向型バイオテクノロジー（e-バイオ）を起点とする藻類工学の夜明け—」（東京大、宮崎大）▷「伝統的発酵微

生物の新しい利用展開」（琉球大、山口大）▷「D-アミノ酸研究の最前線—その新しい生物機能と代謝—」（九州大、名古屋大）▷「生物工学教育—高等教育の実質化は大丈夫か—」（九州工業大、信州大、長浜バイオ大、東北大、大阪大）▷「ナノバイオテクノロジーによる環境への新アプローチ」（名古屋工業大、九州大）▷「産業酵母の育種技術の現状と展望—有用機能の向上をめざした多面的アプローチ—」（奈良先端大、京都大）▷「ゲノム基盤にもとづく合成ゲノム生物学への新展開」（慶応大、信州大）▷「1分子1細胞アッセイ技術に

バイオ最前線

④

基づく生物工学の最近の潮流」（名古屋大、大阪府立大、神戸大）▷「動物細胞培養で求められる安心・安全—見直される水産品—」（福井大、北海道大）▷「植物遺伝子の魅力—生物学分野への応用」（大阪大、東北大、信州大）。

編集協力：日本生物工学会
www.sbj.or.jp

次回は10月20日に掲載